

## 樂園の回復 Paradise Regained.

博士マールカス・ドッド曰く「基督が降らざりしものとして此世界を考究する勿れ」と、然り基督なる實在は此失望世界の必要物なり、基督は此宇宙をして完全ならしめしもの也、基督に依てのみ人世は堪ゆべきものとなり、基督に依てのみ造化は失敗ならざりしを知るなり。

なんぢら我をあふぎのぞめ然らばすくはれん。「イザヤ」（以賽亞四十五章廿二節）

モーセ野に蛇を擧げし如く人の子も擧げらるべし、凡て之を信ずる者に亡ること無して永生を受しめんが爲なり。「ヨハネ」（約翰傳三章十四、十五節）

逆説の如く見へて眞理中の眞理たることは人は自ら勉めて善人たる事能はざる事是なり、罪に依て孕まれ、罪の中に生長せし人が自己**黽勉**にのみ依て罪より脱せんとするは、泉が水源より高く昇らんとするが如き、水夫が風に頼らずして意志の動作にのみ依て船を行らんとするが如き、望むべからざる事なり。エモルソンが處身の術として青年に勧めて言へる *Hitch your wheel to the star*（汝の車を星に繋げ）の語は基督の言へる「爾曹われを離るゝ時は何事をも行能ず」の語と同意義を言ふものなり、我等の救は基督に於て神と繋がるゝより來るものなり、而して如何なる理由の其内に存するにもせよ、福音的基督教會の確信として動かすべからざる事は、即ち基督の生涯と死とは救靈の必要にして基督に依らざれば人は神と一牀たる事能はず又彼が神に對して犯せし罪の赦さるゝことなしとの事是なり。此信仰たる實に基督教會の基礎なり。

實に誠に此ほか別に救ある事なし、蓋天下の人の中に我儕の依頼て救はるべき他の名を賜されば也。

(使徒行傳四章十二節)

此大事實たる我等は推理に依て會得するにあらずして觀察と實驗とに依て確かに知認する處なり、藥品の效用は、其病理學上の作用の知らるゝ前にもあるが如く、基督の救靈力は其理を充分に解せざる前に著明なり、罪の重荷に壓せらるゝもの、良心の譴責に困しむものゝ唯一の特効藥は基督の十字架なり。

摩西の律を身に纏ひ、嚴格清廉なるバリサイ宗の中に錚々の名を以て聞へ、時の猶太人として我も人も許して完全なる人なりと思ひしタルソの保羅も、其の心中の苦より脱せんが爲めには、その心靈を三階の天上にまで引き登せ、無量の自由と擴張とを得むが爲めには彼の才能を見ること糞土の如くし、彼の脩鍊を迷愚妄信と見做し、麻衣して塵を頭に糝ナザレの耶穌の十字架の前に慚悔免を乞ふに至て素めて心に安を得たり。

ニユミデヤの一青年が粗大の慾望を抱ひて羅馬に來り、彼の文才と雄辯とは彼未だ卅歳に達せざるに彼をして時の大家として名を伊太利の文學界に轟かしめたり、然れども彼の學と才とは彼をして煩惱犬の支配より救ふ能はず、妾を換ること三度、非正の床に兒を儲け癡愚と知りながら尙ほ色慾の奴隸たるを好みしが、彼一朝聖書を繙ひて左の語に接せしや、基督教會は聖アウガスチンを得、情慾世界は一大醉漢を失ひたり、

行を端して晝あゆむ如くすべし、饕餮、醉酒また奸淫、好色また爭鬭、嫉妬に歩むこと勿れ、  
（ただ）  
んじら主イエスキリストを衣よ、肉體の慾を行はんが爲に其備をなすこと勿れ、

(羅馬書十三章十三、十四)

獨逸ツウリンギヤ森林中の一健兒、長ずるに及びて聖靈創く其心を擾動し、不安の余まり彼は父の命に叛きて一寺院に入り、斷食祈禱の脩業を積み以て偏ひとへに天怒てんどを宥めんとせり、然れども如何せん彼外を改むれば惡念内湧出して止まず、外患内寇共に彼の小心を碎盡さいじんせんとする時、師父スタウピツツの一聲は不可謂いふべからざるの生命力を彼の心に吹入れたり、義人は信仰に依て生く、神はルーテルの罪を赦せり、宇宙はその捨兒を拾ひ上げたり、是ぞ他年ライン河邊に於て世界の王侯綺羅を纏ひ、歐土を迷信僕從の舊態に保存せむと議する時、羅馬の三層冠に對し信仰自由の嚆矢を放ちし偉男子なり。

唯物論者は曰ふ、是れルーテルの迷信の爲さしめし所にして恰も野猪は危險を知らざるが如しと、道義學者は曰ふ、是れルーテルの好義心の然らしめし處なりと、然るにルーテル自身は如斯答へらく、

われ若し我の力を頼まば

つとむるとても益ぞなし

神のゑらみにし人にして

我につきそひ給はずば。

彼何人をたづぬるか、

イエスキリスト其人なり、

萬軍の主と叫び奉りて、

世々永久かはることなし。

英國ベツドフホド村に一錫工あり、彼の無學はその多問性の要求に應じて天地の大道を彼に解明する能はず然るに彼の胸中に純白過敏なる心靈の宿るありて、彼れ一度神聖なる人生の貴重なるを認めしや、心を盡し精神を盡し心中の魔力を減せんとせり、悔改の涙は流れて止む時なく、免を乞ふの號叫は聞くものをして彼を憫憐せしめたり、仰で天を睹れば太陽はその光線を彼が如き罪人の上に輝すことを惜むが如し、伏て地を臨めば草木は彼に衣食を供することを耻づるが如し、彼は良心を有せざる禽獸の境遇を羨みたり、聴かずや魔軍は彼が永遠の刑罰を受けるを見て暴笑するの聲を。

然るに此重荷を負へる旅行者も基督の十字架の前に於ては知らずして脊上の荷擔の落るを感じ、彼後日此經驗を記して曰く、

嗚呼、基督、基督——余の眼中基督を除て他に一物なきに至れり、余は今基督の血、埋葬、復活等の貴重なる事實を彼是と個々に余の心に留めずして、耶蘇を以て完全充分なる救主として見るに至れり、余の已に受けし恩恵は恰も富貴の人が財布の内に持ちあるく鏹錢小錢の如きものにして彼の金銀寶玉は家に於て革苞の中に澤山貯へあるが如し、嗚呼余の金銀も余の主余の救主なる基督に於て貯へあるなり、主は神の獨子と合牀の奧義に余を導けり、余は彼に連りて余は彼の肉の肉なり、若し彼と余とは一牀なりとならば彼の義、彼の功、彼の勝利皆余のものなり、余は今同時に天と地とに棲息するものなるを知れり、即ち余は余の基督に於て天に在るものにして余の肉牀を以て地に留まれり、……我等は基督に依て義を完せり、彼に依て死し、彼に依て死より甦り、彼に依て罪と死と惡魔と陰府とに打勝てり、余は叫べり、「主を讚美せよ

彼の聖殿に於て神を讃美せよ」と

是ぞ天路歷程の著者として最も純粹なる英語を世界の文學史上に遺し、スチユアート家末世の時代に當て英國民に單純有力なる福音を與へしジョン・バンヤンなり。

われ更に何を言はんや、銃を肩にし、夕陽に向て家に歸る途中、「神は其獨子を世に降し賜ふ程世を愛し賜へり」との天聲に感殺せられ、銃を地に擲<sup>なげうち</sup>て感謝の涙と共に身を天命に委ねしビーチャル氏。暴風雨を犯し、クエクル派の禮拜堂に臨み、「青年よ自己を見ずして十字架を見よ」と教師にアテコスリ説教をせられて行性品性共に大變動を來せしスボルジョン氏。多年完全なる道德を實行して神と人との前に己を義とせんと勉めしも終に能はずして

Just as I am without one plea, —

But that thy blood was shed for me,……

われをばたのまじ十字架にのぼりし

耶蘇よびたまへば我キリストにゆく

の歌を以て始めて歡喜を以て神を讃美せしエリオット婦人、——嗚呼余は余の筆の鈍きを歎ず、基督の十字架てふ歴史上の大奇跡、其哲理は何であれ、其事實を疑ふものは電光暗夜を輝す時電氣の存在を疑て可なり、怒濤船を覆す時颶風は吹かずと信じて可ならむ。

罪人の長なる余も終に此歴史上の大事實を忽<sup>ゆ</sup>がせにする能はざるに至れり、洗禮を受けて後十數年、種々の馬

鹿らしき經驗と失敗の後、天賦の精力と腦力とを物にもあらぬものゝ爲めに消費せし後、余は余の罪の有の儘にて、父の慈悲のみを頼にて父の家に歸り來り、理屈を述べず義を立てず、唯余の神が余の爲めに世の始めより備へにし、神の小羊の贖に憑<sup>よ</sup>らざるを得ざるに至れり。嗚呼神よ余は信ぜざるを得ざれば信ずるなり、耶穌基督の十字架の爲めに余の赦すべからざる罪を赦せよ、余は今爾に捧ぐるに一の善行のあるなし、余は今余を義とする爲めに一の善性の誇るべきなし、余の捧物は此疲れ果たる身と精神なり、此碎けたる心なり、

あゝ神よねがはくはなんぢの仁慈によりて我をあはれみ、

なんぢの憐憫のおほきによりてわがもろくの<sup>あやまち</sup>愆<sup>とが</sup>をけしたまへ。

わが不義をことごとくあらひさり、

我をわが罪よりきよめたまへ。

われはわが愆を知る、

わが罪は常にわが前にあり。

我はなんぢにむかひて獨なんぢに罪ををかし、<sup>みまえ</sup>聖前にあしきことを行へり。

されば汝ものいふときは義とせられ、

なんぢ<sup>さば</sup>鞫<sup>さば</sup>くときは咎めなしとせられ給ふ。

視<sup>よこしま</sup>よわれ邪曲<sup>よこしま</sup>のなかにうまれ、

罪にありてわが母われをはらみたりき。

なんぢ眞實を心の衷にまでのぞみ、

わが隠れたるところに智慧をしらしめ給はん。

なんぢヒソプをもて我れをきよめたまへ、

さらばわれ淨まらん、

我をあらひ給へ、

さればわれ雪よりも白からん。

なんぢわれによろこびと快樂とをきかせ、

なんぢ碎きし骨をよろこばせたまへ。

ねがはくは聖顔みかほをわがすべての罪よりそむけ、

わがすべての不義をけしたまへ。

あゝ神よわがために清き心をつくり、

わが衷うちになほき靈をあらたにをこしたまへ。

われを聖前より棄てたまふなかれ、

汝の清き靈をわれより取りたまふなかれ。

なんぢの救のよろこびを我にかへし、

自由の靈をあたへて我をたもちたまへ。

さればわれ愆ををかける者になんぢの途ををしへん、  
罪人はなんぢに歸りきたるべし。

.....  
なんぢは祭物そとへものをこのみたまはず、

もし然らずば我これをさげん、

なんぢまた燔祭はんさいをも悦びたまはず、

神のもとめたまふ祭物はくだけたる靈魂なり、

神よなんぢは碎けたる悔しかろしころを藐めたまふまじ。

.....

.....

(詩篇第五十一篇)

時に聲あり余の全身に染渡りて曰く、汝の捧物は受納せられたり、汝舊衣を脱して我が汝の爲めに備へし義の衣を着よと、われ答て曰く、爾の僕此處にあり爾の聖意みこころに依りてわれを恵めよと、時に余は徳流とくりうの基督より我身に注入するを感じマールゴり(馬可傳五章三節)、而して歡喜平和感謝の情は交々來て余の心を滿たし、余をして席に堪へざらしめたり、余は直に林中里離れたる所に至り、鴨枝ひよどりに巢を結び、羊鳴遠く聞へて聲微かなる處、獨り清流の邊に跪き、感謝の祈禱を捧げたりき、余の祈禱今は一の願事の存するなく、たゞ基督なる言盡いひつくされぬ神の賜物に就て神に感謝するのみなりき。



余の此時の安心は我國維新の際國司諸侯が邦土を天皇陛下に返上せし時の感なりしと考ふるなり、彼に支配すべき領土のあるあれば彼に養ふべきの臣下あり、朝廷に納むべきの貢あり、彼の収入は何十萬石の多額なりしと雖も、彼の勢權は彼の國內に普あまねかりしと雖も、彼が己の領土を外敵より保護するの心配、彼の臣下に平和と家祿かろくとを與ふるの責任は、彼をして榮譽と權力との内に憂愁日月を送らしめたり、然るに邦土奉還となりて聖明天子せいめいてんしは彼の領地を受納し給ふと同時に之に附着する責任を悉く引受け給ひければ、國司は今ほ純然たる朝廷の臣下となり、只命を朝廷に待ち、以てその恩に沐浴するに至れり、而して慈惠に富む我天皇陛下は特別の御思召おぼしめしを以て元高十分の一を彼に賜はり、加ふるに高位勳爵の恩典を以て待遇せらる、邦土奉還は我國正統なる皇室の威權を増し、諸侯を無益の責任と苦勞とより脱せしめ、天下一統に歸して庶民太平を謳ふに至らしめたり。

余も余の身と靈とを神に捧げざりし時は「自身」てふ小天地を支配する、一小君主なりき、此小國其丈たけ五尺に充たざれ共種々の義務と責任との附着するありて能く之を治め能く其本分を盡さんが爲めには余は全心全力を盡したり、其鄰人に對する外交は實に混雜を極めたるものにして、一を利せんとすれば他を害するあり、諸ての人に満足と與んとすれば誰も満足せざるあり、全く消極的の政略を取らんとすれば天道てふ大法令のあるありて余の冷淡と怯弱きよじやくとを責むるあり、退て身を隠す能はず、進んで義務を果す能はず、實に此世を憂世とは能くも言ひしものなりと思へり、而して其對鄰策たいりんさくの未だ局を結ばざるに、宇宙の中央權を握る天帝は來て頻りに世より貢を促すあり、命あり曰く「我は汝に銀五千を預け置けり、我にその利を拂へ」と、而して若し余にして之に應ぜざれば余は無益なる僕として外の幽暗くらみに逐おひやられ其處にて哀哭切齒かなしみはがみせざるべからず（馬太傳二十五章）余は王命したがに順

ふの利と快とを知ると雖も、如何せん國事多端なると王命の嚴にして犯すべからざるとより余の貢は年々未納の高を増加し、戰々競々として薄水を踐の思をなし、此不愉快なる生涯を以て避くべからざる運命と見做し、不快憂鬱の中に貴重なる時間を消費したりき。

然ども余の全身を神に奉還せよとの命あるや、余は以爲らく、余にして今悉く余の持物と身と靈とを神に還さんか、神は余をして乏からしむるも知れず、掌にある一羽の雀は枝上にある二羽に勝る、物は可成丈手ばなさぬが宜し、余は余の収入の十分の一を捧ぐべし、余は忠誠を以て神に主として臣事すべし、余は余の行爲に大改革を實行し神の僕たるに耻ざる舉動をなすべし、然れども余の全身を神に上げ渡すに至ては余は容易に肯ずる能はず、而して亦道義學者「新神學者」の輩も傍より余に贊して曰く「汝憶病者よ、汝は汝の義務を果す能はざるか、神が汝に道德上の律を與へしは汝が之を實行するの力を有すればなり、西郷隆盛言はずや、

聖賢にならんと欲する志想古人の事蹟を見て迎ても及ばぬと云ふ様なる心は戰に臨んで逃ぐるより卑怯と、基督教の贖罪論なるものは人を怠情怯弱ならしむるものにして博學勇敢の士の以て意に介すべきものにあらず、汝基督を模範として學べよ、精神一發何事不成、汝の意志を硬固にし、萬障を排除し、完全なる生涯の見本を世に示せよ」と。

是を思ひ彼を思ひて余は尙ほ數年間神より獨立を維持せり、余は尙ほ余の領土を保ち應分の貢を納めて余の君主たるの權力を保存せり、然れども窮迫は終に余をして邦土奉還の策を講ぜざるを得ざるに至らしめたり、余の自負心に逆ひ、道義學者の嘲弄を省みず、余は余一人の決心を以て余の身も靈も慾も望も愛も意志も悉く神に引

渡せり、而して見よ余は始めて富めるものとなれり、生命は得んと欲して失ひ失て而して得らる、余は余を捨て、余を得たり、全身奉還の結果は舊祿十分の一の下賜にあらずして神と宇宙と永遠とはその報として余に賜はれたり。

奉還後の余の生涯は實に愉快安心なるものなり、余の義務は常に神命を待つにあり、諸ての善き物は今は余の勞働の報酬として余の受くるものにあらずして、余の信仰に對する神の賞與として余に賜はるものなれば、余は莫大なる請求を神より爲し得べく、又神は余の勞働に百倍する賜物を余に下し給ふなり、衣食を得るの心配今は全く余の心より絶へたり、「己の子を惜ずして我儕衆の爲に之を付せる者は豈かれに併て萬物をも我儕に賜はざらん乎」(羅馬書八章三十二節)

エホバはわが牧者なり、我乏しきことあらじ、エホバ我をみどりの野にふさせ、いこひの水濱にともしたまふ、エホバはわが靈魂をいかし、名のゆゑを以て我をたゞしき路にみちびき給ふ、たとひわれ死のかげの谷をあゆむとも禍害をおそれ、なんぢ我とともに在せばなり、なんぢの咎なんぢの杖われを慰む、なんぢわが仇のまへに我がために筵をまうけ、わが首にあぶらをそそぎたまふ、わが酒杯はあふるゝなり、わが世にあらん限りはかならず恩恵と憐憫とわれにそひきたらん、我はとこしへに

エホバの宮にすまん

(詩篇第二十三篇)

余は今、義務として善を爲さるに至れり、傳道にまれ慈善にまれ余は余の快樂として是に従事し得るに至れり、ジョーン・ハワードは監獄改良事業を以て彼の道樂(Tobby)なりと云へり、基督信徒の事業は實に彼等の遊戲

なり、リビングストンの紀行を読む者は誰か彼の語調に笑談戲言の多きに驚かざる、將に獅子に嚙殺されんとし僅かに彼の從僕の援助に依て救はれし時、彼は笑て獨言して曰く、「我等は天職を終るまでは不滅なるが如し」(We seem immortal till our work is done.)千八百七十二年七月十日彼は二年間の探檢を終て海濱に達するや、彼の手帳に左の如く記せり、

特別なる目的なくして祈禱斷食するは無益に時を消費するなり、之一種の贅澤と見做して可なり、他人に一の利益を與へざればなり、之病中に苦痛の爲に叫號するが如きものなり——實に或人は病める時は絶間なく呻ことを以て樂となすが如し、——余の考ふるに斷食日(fasting)卅日間は毎年亞非利加内地の蠻族を見舞ふ爲めに消費すること最も利益あることならん、是實に避くべからざる饑渴を感謝しつゝ忍ぶの道なり、達すべき目的の遠大なるを知れば人は砂糖も茶も咖啡もなくなつて忍び得るものなり、余は千八百六十六年九月より六十八年十二月までは等の食用品何れも味ひし事なかりき。

是ぞ獅子の哮るも、大蛇の蟠かまるも、熱病の犯すあるも、土人に攻撃さるゝも、蠅に惱まざるゝも、少しも意に介する事なく、歡喜と讚美とを以て三十年間一日の如く、闇黒大陸を縱横截斷し、終に「噫神よ余は再び余の全身を悉して爾に捧げまつる、願くは余をして亞非利加大陸なる人類の此大患を癒すが爲め一人前の職を盡さしめよ」の語を以て赤道直下バングエロー湖邊に於て永眠の枕に就きし偉人リビングストンなり。

義務よ、義務よと叫ぶものは能く義務を果す人にあらざるなり、義務の念は荷擔となり、心志を壓してその活動力を減殺するものなり、如何に面白き學科も學校の課目となりて強ひらるゝ時はその甘味返て苦味と變ずるが

如く、如何に高尚なる事業も、義務として之に當る時は乾燥無味の奴隸的事業と變ずるなり、基督信者の大事業家たり得るの主要原因は彼は已に事業を遂げしものなればなり、神の前に己を義とし人の前に名譽を博するの必要なければなり、恰も億萬の富を有して金錢を得るの必要なきものは常に商業界に於て勝利を得るものなるが如し、名將は已勝の戰に非ざれば戰はずとかや、故に彼が戰場に臨むや快活自由、樂戰して敵を追窮す。聞く大石内藏之助が吉良上野介の邸を襲ふや、彼れ先づ竊に勇士二人を遣し、兼て内應として吉良邸に遣し置し婦人某と計り、上野介が廁に至るの際、彼の白頭を切斷したりと、而して目的物已に掌中に入り、積年の憤忿已に霽れてより、義士の心中に一の懸念の存するなく、今は死するも何かせん、思は晴れつ身は捨つる、浮世の月にかゝる雲なし、いざ一戰して慰さまん、兼て磨きしこの劍、岩をも透す桑の弓、受けて知れかし、武士の膽、身を惜まぬは君が爲め、思ぞ積る白雪を、散すは今朝の春風、嗚呼誰か此思煩のなき義士の鋒前に抗するものあらむや。

基督曰く「懼るゝ勿れ我すでに世に勝り」と (nekeka have conquerd, 已成動詞なり)、道義學者竝にユニテリヤンは何と云ふとも福音的基督信者の安心勇氣の大泉源は實に基督に於ける已成の勝利に存するなり、我の爲すべき事は基督已に我が爲めに爲し遂げたり、我の義は基督に於て已に天にあり、我は已に彼れの血を以て買はれたり、我の得べきものは我已に之を得たり、いざ残余の生涯は報恩の戰して樂まんものをと、是實に眞正の基督信徒は常に泰然として余裕あるの理由なり、彼が老て益々壯なるの解明なり。無冠王コロムウエルが未だイリノの農夫たりし頃彼の從妹セントロージョン夫人に送りし書簡として保存せられたるものゝ中に左の語あり、

前略……………余の靈は長者ともの教會にあり、余の身は希望の平安に居る、而して若し此世に於て余の神の爲

めに働らき又は忍ぶを得、以て彼の榮光を顯すを得ば、余の幸之より大なるはなし、實に神の味方となりて身を捧ぐべき人の中に、この卑しき余の如きものはあらず、余は已に前以て多分の給料を受けたり、………：………：嗚呼神の恵は大なるかな、願ふ余の爲めに神を讚美せよ、願ふ余の心の中に善工を始めし者これをキリストの日に完ふせられんことを余の爲めに祈れよと云々、

カーライル此書簡を評して曰く、

嗚呼近世の讀者よ、此書簡解し難く見ゆるなれども余は汝が其意を解せんがために勉めん事を汝に勸む、萬金の價值ある人魂存在の確證其内にあり、………：………：是實に英雄の起り得べき時代ならざりしや、實に英雄たるは難からざりしなり

と、英國を改造し歐洲を洗淨せし彼の功績も彼の救主が彼を罪より救はんが爲め十字架上に流せし寶血の報恩として見る時は彼に取りては糞土の價值もあらざりしなり、「主よ、假令余は凄慘卑賤なる罪人なりと雖も恩恵に依て爾と契約の裡にあり」とは彼の最終の祈禱なりき、佛のラマーチン英のフレデリックハリスンの輩がコロムウエルを解し得ざるの理由は單に彼等が無冠王の宗教を解せざるに依るなり。

基督の救に與かりてより義務を盡すは快樂と變ずると同時に罪を犯すは苦痛と變ずるなり、善を愛し惡を惡むの念は始めて此時に起るなり、即ち善惡に對する余の好憎は轉倒せしなり、善を爲すは荷擔ならず、惡を避くるに勢力を要せず、昔時の虐王が自由氣儘に自己の意向に従ひて事を爲せしが如く、基督の救に預かりしものは己の意の儘に何事をも爲し得るなり、善人を縛るの法律あるなし、惡我の忌嫌ふ處となり、善我の戀慕ふ處となり

て我は始めて自由の人となるなり、基督の言給ひし「眞理は爾曹に自由を得さすべし」、又「子（神の子）もし爾曹に自由を賜<sup>あたへ</sup>なば爾曹誠に自由を得べし」（約翰傳八章卅二卅六節）との人靈<sup>じんれい</sup>放免<sup>ほうめん</sup>の宣告は實に此様を指すなるを知れり。

私の罪は免<sup>ゆる</sup>されたり、我如何でか鄰人の罪を免さざるを得んや、神我を愛せり、神の愛我が心に溢れて我は私の鄰人を愛せざるを得ず、人は神より赦されざる迄は心よりして他を赦さざるなり、富足で徳足るの理由は蓋し此に存するなるべし、有限なる人靈が無限の博愛を以て衆に及ぼさんとする事は望むべくして行はるべきことにあらず、私の盃溢れて後我は鄰人に私の歡喜の溫氣を傳へ得るなり、愛の泉源は神なり、我神に接して後、愛我を充たし而後又我より流れ出るなり。

此主義に反對して常に引用さるゝ語は實に約翰傳十四章の十五節なり、「イエス曰けるは……若し汝曹我を愛するならば我<sup>いましめ</sup>誠を守れ（命令なり）」と、即ち基督を愛せんと欲するものは先づ彼の誠を守れとなり、誠を守るは先きにして愛するは後なり、是即ち余輩の唱ふる救靈の道と撞着<sup>どうあやく</sup>するものなるが如し、勿論聖書はその全軀を貫徹する精神を以て解すべきものなれば假令二三節句の之に反對の趣意を示すことありとするも余輩の信仰は變ぜざるなり、然れども此節を解するに前後の連結よりすれば基督は完全なる行を以て彼を愛するが爲の必要なる條件となしゝにあらざりしは明なり、基督の請求は彼の弟子たるものは感謝の捧物として彼の誠を守るべしとなり、如斯は恩恵を以て救世の基礎とする基督教の教理として最も見易き眞理と云はざるを得ず、況んや近世の節句批評學は余輩の援助として來るありて此難句を明瞭に余輩の爲に

解するあるに於てをや、「守れ」(Terésete)は「守るならん」Terésete なり、前者は舊來の本文なりしも、後者は最近の批評學者の採用する處にして英文改正翻譯は之に依て舊來の Keep my commandments を Ye will keep my commandments と變更せり、即ち全節の意は基督の誠を守るに至るは彼を愛する自然の結果なり、彼を愛すれば必ず彼の律に従ふに至るべしとなり。

第二の難句として余輩の前に常に引證せらるゝものは約翰第一書四章廿節の半節「既に見ところの兄弟を愛せずして未だ見ざる神を何で愛せん乎」なり、余輩の信仰に反對するものは曰く、是れ實に愛鄰を愛神の前に置くものにして神を愛せんとするものは先づ人を愛すべしとの教訓なりと。

余輩は云ふ、此半節を以て恩惠節(Doctrine of Free Grace)に反對するものは詩篇の「愚なるものは心のうちに神なしといへり」の語より「神なし」の片句を取りて聖書は無神論を教ゆるものなりと述べし人と比せざるべからず、讀者は只此節の前後兩三節を一見すれば使徒約翰の意を最も明白に解するを得べし、「我儕神を愛するは彼先づ我儕を愛するに因る」、「もし我は神を愛すと言て其兄弟を憎む者は是誑者なり」何となれば、眼に見へざる神を愛するものが眼に見ゆる兄弟を愛せざるの理由なればなり、

基督信者善行の本源は保羅の言へる「キリストは我儕のなほ罪人なる時われらの爲に死たまへり、神は之によりて其愛を彰し給ふ」との意に存するなり、余輩はもはや道德上の義務として惡を避け善を爲すにあらずして基督の愛に勵(Sunechei Constraineth 「強ひられて」)されてなすなり、即ち我が心足りて余裕あれば我は世に與へざるを得ざるに至ればなり、「我福音を宣傳へずば實に禍なり」我善事業に従事せざれば實に禍なり、我の心中に存



する此溢るいばかりの恩恵、我若し是を他に漏すにあらざれば、我は歡喜を以て破裂せんとす、我は實に「愛によりて疾わづらふ」(雅歌五章八節)ものなり

われ神と和合してより我に平和を與へ得ざりし學問も今は再び無限の快樂と慰藉いせきとを我に給するに至れり、宇宙は眞に壯嚴なる大美術となりたり、

I fear no more. The clouded face

Of Nature smiles; through all her things

Of time and space and sense I trace

The moving of the spirit's wings,

And hear the song of hope he sings. — Whittier

我もはや懼れず、

曇りし自然の面かげも

今は笑を含みけり、

限りあるもの、朽ちるもの、

感じ得るものすべて皆、

觸る聖靈の羽音して

希望の讚美唱へける。

歴史は大戯曲として味ふべく、地球は大花園として眺むべし、憂鬱の中に沈溺せし余の生涯、今は春蕾しゅんらいと共に動き、蟄蟲ちつちゅうと共に萌蘇し、生命は重荷にあらずして快の快たるものとなれり、今は見るもの聞くもの一として余の注意を惹かざるはなし、

Christianus sum; nihil in rerum natura a me alienum puto.

我は基督教徒なり、人と自然に關する事にして我が心實なる攻究を要せざるものなし、

何となれば是みな我儕の屬にして、我儕はキリストの屬、キリストは神の屬なればなり

(「コリント」  
哥林多前書三章二十一、二十二節)

義務其苦味を失ひてより、仕事は苦痛ならざるに至る、額に汗して食を求めざるべからざる罪人も今は安心喜樂の中に神の賜物を受くるに至る、經濟學者の稱する「勞働は荷擔かたんなり」(Labor is onerous)との言は變じて「勞働は快樂なり」と云ふに至る、此十九世の繁忙社會に於て誰か永久の休息を永久の勞働の中に欲せざるものあらんや、今の人は休息、休息と絶叫するものなり、過勞は彼等の最も懼るものなり、職工は勞働時間を一日八時間に縮めんが爲めに同盟罷工ひこうをなしつゝあり、學者は疲勞を怖れて鴻雁かりがねの春秋と共に南北に移轉するが如く寒熱に迫はれながら年中迷廻りつゝあり、而して勞働の主なる基督の僕にして然も牧者の任を辱かたじけなふするものも疲勞てふ惡魔に強迫せられて、惡疫、羊を犯すにも拘らず、神の聖殿は寂寞として人なきに至るに關せず、疲勞せりと一言は九鼎きうていの重きを有する理由となり、世の怠惰臆病者の眞似を爲して山に走り込み海濱に惰眠を貪るに至りしは十九世末期の現象なり、今世の人は勞働の爲めに疲勞しつゝあるのみならず亦た疲勞せんとの心配より疲勞

い、つ、い、あ、る、な、り、。

疲勞は筋肉及び神經の過度使用より來るは少くして精神の過勞より來るは多し、筋肉も神經も使用せざれば共に衰弱するものなり、「錆るよりは磨消せよ」(Better to wear out than to rust out)使用せざる精力は錆朽るなり、勞働するに勝る攝生法のあるなし、心配は毒物の長にして疲勞は病の大原因なり、ソロモン王曰く

心のたのしみは良藥なり

靈魂のうれひは骨を枯す

(箴言十七章廿二節)

而して心配の原因は充たざる責任の念なり、若し、借財は人物伸長の最大妨害なりとならば、罪の念(即ち神に對する借財)は無限の生を有する人靈の活動に及ぼす最大障礙たるや明かなり。

罪より赦されて我等は勞働するも疲勞せざるに至る、ヘルキュレスの如き活動力は我等が主耶蘇基督を信じてより來る、

疲れたるものには力をあたへ、勢力なきものには強きをまし加へたまふ、年少きものもつかれてうみ、壯なるものも衰へおとろふ、然はあれどエホバを俟望むものは新なる力をえん、また驚のごとく翼をはりてのぼらん、走れどもつかれず歩めども倦ざるべし、

(以賽亞四十章廿九、卅、卅一節)

兩肺朽去て尙ほ意氣自若として救世に従事せし故澤山保羅、過敏神經を印度の熱風に暴しながらペルシヤ語に聖書を翻譯せしヘンリー・マーチン、英國の汚穢を排除せんが爲に山の如くなる外患内寇に打勝ちつゝ猶ほ八旬の健康を維持せしジョン・ウエスレー、——然り、詩人ゲーテの所謂「休むな急ぐな」の生涯は基督の救に與

かりて后始めて達し得べきなり。

然り天道は非ならざるなり、我に死の懼怖あり、而して世に此懼怖を取去るの道あり、我に神と共ならんとするの希望あり、而して我の神に至る道のあるあり、世に不満と不幸とあり、而して之に勝るの歡喜と満足とあるあり、世に苦痛あり、而して之を醫するに足るの力あり、我は歡樂を以て此地球に棲息し得るなり、我は靜肅安然に天與の智能を磨き得るなり、我は偽善褻瀆の危險なくして慈善傳道に従事し得るなり、教導補育せんとするの妻は快樂なる「ホーム」を我に供するあり、基督の愛神主義は利他利己兩主義の上に超越して最も多く他を利して最も多く己を利するの道を我に教へり、我は罪を自覺して之を避くるを得べし、我は我に附與されし赦免は神の公義に戻らざるものなるを知るが故に我が全性の應諾を以て之に與かるを得べし、我の求めんと欲する處のものにして天の我に附與せられざるはなし、造化は實に失敗ならざりしなり、エムマヌエル、神我等と共に在り、人世は一度通過するの價值あり。

博士マーカス・ドッドは「キリストがいなかった世界として、この世界を考えてはならない」と言うが、まさにキリストという実在はこの失望に満ちた世界にとって必要不可欠なものである。キリストは、この宇宙を完全なものにした方であり、キリストによつてのみ、人の世は耐えうるものになった。また、キリストによつてのみ、天地創造が失敗ではなかったことを知るのである。

「わたしを仰ぎ見て救われよ。」

(イザヤ書四十五章二十二節)

「モーセが荒野で蛇を上げたように、人の子も上げられなければなりません。それは、信じる者がみな、人の子にあつて永遠のいのちを持つためです。」

(ヨハネの福音書三章十四、十五節)

逆説のように見えて、真理中の真理であることは、人間は自力で努力して善人になることはできないという事実である。罪によつて宿され、罪の中で成長した人間が、自分の努力だけで罪から脱出しようとするのは、泉の水が水源よりも高く昇ろうとするようなものであり、船乗りが風に頼らず、自分の意思の力だけで船を進めようとするような望みのないことなのだ。エマーソンが生き方の手本として青年に勧めた言葉、「Hitch your wheel to the star」(汝の車を星に繋げ)は、キリストが言った「あなたがたは、わたしを離れては、あなたがたは何もすることができない」(ヨハネの福音書十五章五節)という言葉と同義である。私たちの救いは、キリストにあつて神と結びつくことから来る。そして、その内にどのような理由があるにせよ、福音的キリスト教会の揺るぎない確

信は、キリストの生涯と死は魂の救いに必要であり、キリストによらなければ、人は神と一体になることはできず、また、神に対して犯した罪を赦されることもない、ということである。この信仰こそ、まさにキリスト教会の土台である。

この方以外には、だれによっても救いはありません。天の下でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名は人間に与えられていないからです。

（使徒の働き四章十二節）

この重要な事実は、私たちが推理によって理解するのではなく、観察と実験によって確かに認識するところである。薬の効能が、その病理学的な作用が知られる前にも存在するように、キリストの魂を救う力は、その理屈を十分に理解する前から明らかである。罪の重荷に押しつぶされる者、良心の呵責に苦しむ者にとって、唯一の特効薬はキリストの十字架である。モーセの律法を身にまとい、厳格で清廉なパリサイ派の中で屈指の評判を持ち、当時のユダヤ人として自分も他人も認める完全な人だと思われていたタルソのパウロも、心の苦しみから脱するために、また、その魂を第三の天にまで引き上げ、限らない自由と広がりを得るためには、自分の才能を糞土のように見なし、自分の修行を迷信や妄信だと見なした。そして、麻の衣を着て頭に塵を振りかけ、ナザレのイエスの十字架の前に懺悔し、赦しを乞うに至って、初めて心に安らぎを得たのである。

ヌミディアの一人の青年が、粗野な欲望を抱いてローマに来て、その文才と雄弁さによって、彼はまだ三十歳にもなっていないのに、当時の大家としてイタリアの文学界に名を轟かせた。けれども、彼の学問と才能は、彼を煩惱の犬の支配から救うことはできず、妾を三度も変え、非嫡出子を設け、愚かだと知りながらも色欲の奴隷

であることを好んだ。しかし、彼がある朝、聖書を読み、次の言葉に触れると、キリスト教会は聖アウグスティヌスを得て、情欲の世界は一人の大酒飲みを失ったのだ。

遊興や泥酔、淫乱や好色、争いやねたみの生活ではなく、昼らしい、品位のある生き方をしようではありませんか。主イエス・キリストを着なさい。欲望を満たそうと、肉に心を用いてはいけません。

(ローマ人への手紙十三章十三、十四節)

ドイツのチューリンゲンの森の中にいた一人の屈強な青年は、成長するにつれて聖霊が初めてその心を揺り動かし、不安のあまり、彼は父の命に背いて一つの修道院に入り、断食と祈祷の修行を積み、ひたすらに天の怒りを和らげようとした。しかし、どうにも、外見を改めても悪い思いが内から湧き出して止まらず、外の災いと内の悩み両方が、彼の小さな心を砕き尽くそうとする時、師父シュタウピッツの一言が、言い表せないほどの生命力を彼の心に吹き込んだ。「義人は信仰によって生きる」。神はルターの罪を赦した。宇宙はその捨て子を拾い上げたのだ。これこそが、数年後、ライン川のほとりで、世界の王侯たちが綺羅をまとって集まり、ヨーロツパを迷信と隷属という古い状態に留め置こうと議論する時、ローマの三重の冠(ローマ教皇がかつて戴冠式などの公式な儀式で着用していた特別な冠)に対して信仰の自由ののろしを上げた偉大な人物、ルターである。

唯物論者は、「これはルターの迷信がさせたことで、イノシシが危険を知らないのと同じだ」と言うだろう。道義学者は、「これはルターの正義を愛する心がさせたことだ」と言うだろう。しかし、ルター自身は、このように答えている。

われ、もし、わが力を頼まば

努むるとても益ぞなし

神の選みにし人にして

我につき添い給わずば。

彼、いかなる人を尋ねるか、

イエス・キリストその人なり、

万軍の主と叫び奉りて、

世々永久変わることなし。

イギリスのベッドフォード村に一人の錫職人<sup>すず</sup>がいた。彼の無字はその探究心の要求に応じて、天地の大いなる道を彼に説明することはできなかった。しかし、彼の胸中には純白で過敏な魂が宿っており、彼が一度神聖なる人生の貴重さを認めると、心と精神を尽くして心の中の魔力を滅ぼそうとした。悔い改めの涙は止まる時がなく、赦しを乞う叫びは聞く者を彼を憐れませた。天を仰げば、太陽は彼のような罪人の上に光を輝かすことを惜しむかのようであり、地に伏せば、草木は彼に衣食を提供することを恥じるかのようだった。彼は良心を持たない鳥獣の境遇を羨んだ。魔の軍勢が彼が永遠の刑罰を受けるのを見て嘲笑する声を聞いただろうか。

しかし、この重荷を負った旅人も、キリストの十字架の前では、知らずして背中の荷物が落ちるのを感じた。彼が後日、この経験を記して言うには、



ああ、キリスト、キリスト——私の目にはキリストを除いて他に何もなくなった。私は今、キリストの血、埋葬、復活といった貴重な事実を一つひとつ心に留めるのではなく、イエスを完全にして十分な救い主として見るに至った。私がすでに受けた恵みは、あたかも裕福な人が財布の中に持ち歩くわずかな小銭のようなものであり、彼の金銀宝石は、家で革の袋の中にたくさん貯められているようなものだ。ああ、余の金銀も、私の主であり、私の救い主であるキリストの中に貯えられているのだ。主は、神のひとり子と一体となる奥義に私を導いた。私は彼に連なり、私は彼の肉の肉だ。もし彼と私とが一体であるならば、彼の義、彼の功績、彼の勝利はすべて私のものだ。私は今、同時に天と地に住んでいる者であることを知った。すなわち、私は私のキリストにあって天にいる者であり、私の肉体をもつて地に留まっているのだ。……私たちはキリストによって義を全うした。彼によって死に、彼によって死から甦り、彼によって罪と死と悪魔と冥府に打ち勝った。私は叫んだ、「主を賛美せよ、その聖所にて神を賛美せよ」と」

これこそが、『天路歷程』の著者として、最も純粋な英語を世界の文学史上に残し、スチュアート家末期の時代に、イギリス国民に単純で力強い福音を与えたジョン・バンヤンである。

私はさらに何を言うべきか。銃を肩にし、夕焼けに向かって家に帰る途中、「神は、実にそのひとり子をお与えになったほどに世を愛し給うた」(ヨハネの福音書三章十六節)という天の声に感動し、銃を地に投げ捨て、感謝の涙と共に身を天命に委ねたピーチャル氏。暴風雨の危険を乗り越えて、クエーカー派の礼拝堂に赴き、「青年よ、自己を見るな、十字架を見よ」と教師に当てこすりの説教をされて、行動も品性も大きな変動を来したスポルジ

ヨン氏。長年、完全な道徳を実行して、神と人との前に自分を正しい者としようと努めたが、ついにできず、

Just as I am without one plea,

But that thy blood was shed for me,……

われを頼まじ、十字架に上りし

イエス、呼び給えば、われキリストにゆく

（私は何一つ頼らない。十字架のイエスが「来なさい」と招いてくださる、その恵み一つを頼りに、

この罪深きまま、キリストの御許へ進む。）

の歌をもつて初めて喜びをもつて神を賛美したエリオット婦人。——ああ、私は自分の筆の鈍さを嘆く。キリストの十字架という歴史上の大奇跡、その哲理が何であれ、その事実を疑う者は、電光が暗夜を輝かす時に電氣の存在を疑ってもよい。荒波が船を覆す時に嵐は吹かないと信じてもよからう。

罪人の頭である私も、ついにこの歴史上の大事実を軽視することができなくなった。洗礼を受けてから十数年、種々の馬鹿げた経験と失敗の後、天賦の体力と脳力を取るに足らないもののために消費した後、私は自分の罪をありのままにして、父の慈悲だけを頼りにして父の家に帰り来った。理屈を述べず、義を立てず、ただ私の神が私のために世の初めから備えられた、神の小羊の贖いに頼らざるを得ないに至ったのだ。ああ、神よ、私は信じざるを得ないから信じるのだ。イエス・キリストの十字架のために、私の赦すべからざる罪を赦してください。私は今、あなたに捧げる一つの善行もない。私は今、私を義とするための一つの善性を誇るべきものもない。私

の捧げ物は、この疲れ果てた身と精神であり、この砕かれた心である。

神よ私をあわれんでください。あなたの恵みにしたがって。私の背きをぬぐい去ってください。あなたの豊かなあわれみによって。

私の咎を私からすっかり洗い去り私の罪から私をきよめてください。

まことに私は自分の背きを知っています。私の罪はいつも私の目の前にあります。

私はあなたにただあなたの前に罪ある者です。私はあなたの目に悪であることを行いました。ですからあなたが宣告するときあなたは正しくさばくときあなたは清くあられます。

ご覧ください。私は咎ある者として生まれ罪ある者として母は私を身ごもりました。

確かにあなたは心のうちの真実を喜ばれます。どうか私の心の奥に知恵を教えてください。

ヒソプで私の罪を除いてください。そうすれば私はきよくなります。私を洗ってください。そうすれば私は雪よりも白くなります。

楽しみと喜びの声を聞かせてください。そうすればあなたが砕かれた骨が喜びます。

御顔を私の罪から隠し私の咎をすべてぬぐい去ってください。

神よ私にきよい心を造り揺るがない霊を私のうちに新しくしてください。

私をあなたの御前から投げ捨てずあなたの聖なる御霊を私から取り去らないでください。

あなたの救いの喜びを私に戻し仕えることを喜ぶ霊で私を支えてください。

私は背く者たちにあなたの道を教えます。罪人たちはあなたのもとに帰るでしょう。

まことに私が供えてもあなたはいけにえを喜ばれず全焼のささげ物を望まれません。

神へのいけにえは砕かれた霊。打たれ砕かれた心。神よあなたはそれを蔑まれません。

（詩篇五十一篇）

その時、私の全身に染み渡る声があつて、「汝の捧げ物は受納された。汝は古い衣を脱いで、我が汝のために備えた義の衣を着よ」と言つた。私は答えて、「あなたの僕、ここにあり。あなたの御心に従つて私を恵んでください」と言つた。その時、私はキリストの救いの力（徳）の流れが、私の身に注ぎ込まれてくるのを感じた（マルコの福音書五章三十節）。そして、喜び、平和、感謝の情が代わる代わる私の心を満たし、私はその場に留まることができなかつた。私はすぐに、林の中の里離れた所に行き、ヒヨドリが枝に巢を結び、羊の鳴き声が遠くかすかに聞こえる所で、一人清流のほとりにひざまずき、感謝の祈禱を捧げた。私の祈禱は、今は一つの願いごととも存在せず、ただキリストという言い尽くせない神の賜物について神に感謝するのみであつた。

私がこの時感じた安心感は、我が国の維新の際に国司や諸侯が領土を天皇陛下に返上した時の感覚と同じである。彼に支配すべき領土があるからこそ、彼には養うべき臣下があり、朝廷に納めるべき貢物があつた。彼の収

入が何十万石という多額であったとしても、彼の勢力と権力が彼の国内に広く及んでいたとしても、彼が自分の領土を外敵から保護する心配や彼の臣下に平和と家禄を与える責任のために、彼は榮譽と権力の中にありながらも憂愁の日々を送ることとなった。ところが、版籍奉還となり、聖明なる天子が彼の領地を受け納められると同時に、それに伴う一切の責任を全て引き受けられたので、国司は今は純然たる朝廷の臣下となり、ただ朝廷の命令を待ち、それによってその恩恵に浴するに至った。そして、慈悲に富む我が天皇陛下は、特別の思し召しをもって、元の高の十分の一を彼に下され、さらに高位勲爵の恩典をもって遇された。版籍奉還は、我が国の正統な皇室の威権を増し、諸侯を無益な責任と苦勞から脱却させ、天下一統に帰して庶民が太平を謳歌するに至らしめた。

私も、自分の身と魂を神に捧げなかった時は、「自分」という小さな天地を支配する一人の小さな君主であった。この小さな国は、その背丈が五尺にも満たなかったけれども、種々の義務と責任があり、これをうまく治め、自分の本分を尽くすためには、私は全心を尽くした。その隣人に対する外交は、実に複雑を極めたもので、一方を利しようとすれば他方を害することがあり、全ての人を満足させようとすれば誰も満足しないことがあった。全く消極的な政略を取ろうとすれば、天道という大法令があつて、私の冷淡さや臆病を責めることがあった。退いて身を隠すこともできず、進んで義務を果たすこともできない。本当にこの世を「憂世」とはよく言ったものだと思った。そして、その対隣人策がまだ決着しないうちに、宇宙の中央の権利を握る天帝が来て、しきりに世から貢物を促すことがあった。命令があつて、「私はあなたに銀五千を預けておいた。私にその利息を払え」と言

う。そして、もし私がこれに応じなければ、私は無益な僕として外の幽暗に追い出され、そこで泣き叫び、齒ぎしりをせざるを得ない（マタイの福音書<sup>22</sup>章）。私は王命に従うことの利益と喜びを知ってはいるが、どうにも国事が多忙であることと、王命が厳しく犯すべからざることから、私の貢物は年々未納の額を増加させ、おびえながら薄氷を踏む思いをし、この不愉快な生涯を避けられない運命と見なし、不快と憂鬱の中で貴重な時間を消費していた。

しかしながら、私の全身を神に奉還せよとの命令があるや、私は、「もし今、私の持ち物と身と魂を全て神にお返しすれば、神は私を乏しくさせるかもしれない。手のひらにいる一羽の雀は、枝の上にいる二羽に勝る。物はできるだけ手放さない方が良い」と考えた。私は収入の十分の一を捧げるつもりだ。私は忠誠をもつて神に主として仕えるつもりだ。私は自分の行為に大改革を実行し、神の僕として恥じない振る舞いをするつもりだ。けれども、私の全身を神に捧げ渡すことには、私は容易に承知することができなかった。そして、また、道義学者や「新神学者」の仲間も、傍から私に賛同と言う。「汝、臆病者よ、汝は自分の義務を果たすことができないのか。神が汝に道徳上の律法を与えたのは、汝がそれを実行する力を持っているからだ。西郷隆盛は言わなかったか、聖賢になろうとする志で、古人の事跡を見て、とても及ばないというような心は、戦に臨んで逃げる

より卑怯である、

と。キリスト教の贖罪論なるものは、人を怠惰で臆病にさせるものであり、博学で勇敢な者が気にかけるべきものではない。汝はキリストを模範として学べよ。精神一発、何事か成し遂げられないことがあるか。汝の意志

を固くし、あらゆる障害を排除し、完全な生涯の見本を世に示せよ」と。

これ进行、あれ进行、私はなお数年间、神からの独立を维持した。私はなお私の領土を保ち、応分の貢物を納めて私の君主たる権力を保存した。けれども、窮迫はついに、私に版籍奉還の策を讲じざるを得ないまでに至らしめた。私の自尊心に逆らい、道义学者の嘲笑を顧みず、私は一人の決心をもって、私の身も魂も、欲望も願ひも、愛も意志も、全て神に引き渡した。そして见よ、私は初めて富める者となったのだ。命は得ようとして失ひ、失つてこそ得られる。私は私を捨てて、私を得た。全身奉还の結果は、元の禄の十分の一の下赐ではなく、神と宇宙と永远とが、その报いとして私に赐われたのだ。

奉还後の私の生涯は、実に愉快で安心できるものだ。私の義務は、ただ神の命令を待つことにある。全ての善い物は、今は私の劳働の報酬として私が受け取るものではなく、私の信仰に対する神の赏与として私に赐わるものなので、私は莫大な请求を神にすることができ、また神は私の劳働の百倍もの赐物を私に下さるのである。衣食を得る心配は、今や全く私の心から絶えた。「私たちのすべてのために、ご自分の御子さえも惜しむことなく死に渡された神が、どうして、御子とともにすべてのものを、私たちに恵んでくだらないことがあるでしょうか。」

(ローマ人への手紙八章三十二節)

主は私の羊飼ひ。私は乏しいことはありません。主は私を緑の牧場に伏させいこひのみぎわに伴われます。主は私のたましいを生き返らせ御名のゆえに私を义の道に導かれます。たとえ死の陰の谷を歩むとしても私はわがわいを恐れませぬ。あなたがともにおられますから。あなたのむちとあなたの杖それが私の慰めです。

私の敵をよそにあなたは私の前に食卓を整え頭に香油を注いでくださいます。私の杯はあふれています。まことに私のいのちの日の限りいつくしみと恵みが私を追って来るでしょう。私はいつまでも主の家に住みます。

(詩篇二十三篇)

私は今は義務として善を行うことをしなくなつた。伝道にせよ、慈善にせよ、私は私の楽しみとしてこれに従事することができると至つた。ジョン・ハワードは、監獄改良事業を彼の道楽(Hobby)だと述べた。キリスト信徒の事業は、まさに彼らの遊びである。リヴィングストンの紀行文を読む者は、誰か彼の語り口に笑ひ話や冗談が多いことに驚かないだろうか。まさにライオンに噛み殺されそうになり、かろうじて彼の従僕の助けによつて救われた時、彼は笑つて独り言を言つたという。We seen immortal till our work is done. (私たちは、自分の仕事が終わるまでは不滅であるかのようだ。)千八百七十二年七月十日、彼は二年間の探検を終えて海岸に達するや、彼の手帳に次のように記した。

特別な目的なくして祈祷や断食をするのは、無益に時間を消費することだ。それは一種の贅沢と見なしてもよい。他人に何の利益も与えないからだ。これは、病氣中に苦痛のために叫び声を上げるようなものだ、——実際、ある人は病氣の時、絶え間なくうめくことを楽しみとしているように、——私が考えるに、レント(四旬節)の四十日間は、毎年アフリカ内地にいる蛮族を見舞うために費やすこそが、最も利益のあることだろう。これはまさに避けられない飢えと渴きを感じながら耐える道である。達成すべき目的が遠大であることを知れば、人は砂糖も茶もコーヒーもなくして耐えることができるものだ。私は一八六六年九月から六十



八年十二月まで、これらの食品のどれも味わうことはなかった。」

これこそ、ライオンが吠えるのも、大蛇がとぐろを巻くのも、熱病が襲うのも、土人に攻撃されるのも、ハエに悩まされるのも、少しも気にすることなく、喜びと賛美をもって三十年間一日のように、暗黒大陸を縦横に横断し、ついに「ああ、神よ、私は再び私の全身を全てあなたに捧げます。願わくは、私にアフリカ大陸のこの大いなる患いを癒すために、一人前の職を尽くさせてください」という言葉をもって、赤道直下のバングウェウロ湖のほとりで永眠の床についた偉人、リヴィングストンである。

「義務よ、義務よ」と叫ぶ者は、よく義務を果たす人ではない。義務の念は重荷となり、心と意志を圧迫してその活動力を減殺させるものだ。どんなに面白い学科でも、学校の課目となつて強いられる時は、その甘味が逆に苦味に変わるように、どんなに高尚な事業も義務としてそれに取り組む時は、乾燥して味のない奴隷的な事業に変わってしまうのだ。キリスト信者が大事業家たり得る最大の原因は、彼がすでに事業を成し遂げた者であるからだ。神の前に自分を義とし、人の前に名誉を博する必要があるからだ。あたかも莫大な富を有して金銭を得る必要のない者が、常に商業界で勝利を得る者であるのと同じである。名將は既に勝っている戦でなければ戦わない、と言うではないか。それゆえ、彼が戦場に臨む時は快活で自由であり、戦いを楽しんで敵を追い詰める。聞くところによると、大石内蔵助が吉良上野介の邸を襲った時、彼はまずひそかに勇士二人を遣わし、かねて内応として吉良邸に遣わしておいたある婦人と計り、上野介が厠に至る際に、彼の白頭を切断したという。そして、目的物がすでに掌中に入り、積年の憤怒がすでに晴れてから、義士の心中に一つの懸念も存在せず、今や死んで

もどうということはない。「思いは晴れた、身は捨てる。浮世の月にかかる雲はない。いざ一戦して慰めよう。かねて磨いたこの剣、岩をも透す桑の弓、受けて知れかし、武士の心意気、身を惜しまぬは君のため、思いは積もる白雪を、散らすは今朝の峰の春風」。ああ、誰がこの思い煩いのない義士の矛先に抗することができようか。

キリストは言った、「恐れるな、わたしはすでに世に勝っている」と (*nenekēka have conquered*、完了形である)。(道義学者やユニテリアンが何と言おうとも、福音的キリスト信者の安心と勇気の大きな源泉は、まさにキリストにおける既に成された勝利に存在するのだ。私がすべきことは、キリストがすでに私のために成し遂げてくださった。私の義は、キリストにあつてすでに天にある。私はすでに彼の血によって買われた。私が得るべきものは、私がすでにそれを得ている。さあ、残りの生涯は報恩の戦いをして楽しむのではないか、と。これこそ、真のキリスト信徒が常に泰然として余裕がある理由であり、彼が老いてますます盛んであることの解明である。無冠の王クロムウェルがまだイーリーの農夫であつた頃、彼の従妹セント・ジョン夫人に送つた書簡として保存されているものの中に、次の言葉がある。

前略……私の魂は長老たちの教会にあり、私の身は希望の平安にいる。そして、もしこの世において私の神のために働き、あるいは忍ぶことを得て、それによって彼の栄光を現すことができるならば、私の幸いはこれより大なるものはない。実に神の味方となつて身を捧げるべき人の中に、この卑しい私のようなものはいないだろう。私はすでに前もつて多分の給料を受け取っている。……………ああ、神の恵みは大きいことよ。願わくは私のために神を賛美してください。願わくは私の心の中に善い業を始められた方が、それ

をキリストの日に完成されることを私のために祈ってください、云々

カーライルがこの書簡を評して言うには、

ああ、近世の読者よ、この書簡は解し難く見えるかもしれないけれども、私は汝がその意味を理解せんがために努力することを汝に勧める。万金の価値ある人間の魂の存在の確証がその内に含まれている。……………

これは実に英雄が起こり得る時代だったのではないか。実に英雄であることは難しくなかったのだ

と。イギリスを改造し、ヨーロッパを洗浄した彼の功績も、彼の救い主が彼を罪から救うために十字架上で流した尊い血への報恩として見る時は、彼にとって糞土の価値もなかったのである。「主よ、たとえば私は凄惨で卑賤な罪人であるとしても、恵みによってあなたと契約の中にいます」とは、彼の最後の祈祷であつた。フランスのラマルティーンやイギリスのフレデリック・ハリソンといった人々がクロムウェルを理解できない理由は、単に彼らが無冠の王の宗教を理解できないことによるのだ。

キリストの救いにあずかってから、義務を尽くすことは快楽に変わると同時に、罪を犯すことは苦痛に変わるのである。善を愛し悪を憎む念は、初めてこの時に起こるのだ。すなわち、善悪に対する私の好みと嫌悪が転倒したのだ。善を行うことは重荷ではなく、悪を避けるのに労力を要しない。昔の暴君が自由気ままに自分の意向に従つて事を行ったように、キリストの救いにあずかった者は、自分の意のままに何事をも行うことができるのである。善人を縛る法律はない。悪が私が忌み嫌うところとなり、善が私が恋い慕うところとなって、私は初めて自由の人となるのだ。キリストがおっしゃった「真理はあなたがたを自由にします」、また「子があなたがたを

自由にするなら、あなたがたは本当に自由になるのです」(ヨハネの福音書八章三十二節、三十六節)という人々の魂を解放する宣言は、まさにこの様を指すのであることを知った。

私の罪は赦された。私がどうして隣人の罪を赦さないでいられようか。神が私を愛された。神の愛が私の心に溢れて、私は私の隣人を愛さずにはいられない。人は神から赦されない限りは、心から他人を赦すことはない。富が満ちて徳が満ちる理由は、おそらくここに存在するのだろう。有限な人間の魂が、無限の博愛をもつてすべての人に及ぼそうとすることは、望むことはできても行われるべきことではない。私の杯が溢れてから、私は隣人に私の喜びの温かさを伝えることができるのだ。愛の泉の源は神である。私が神に接した後、愛が私を満たし、その後、また私から流れ出るのだ。

この主義に反対して常に引用される言葉は、まさにヨハネの福音書十四章十五節である。イエスが言われたのは……「もしわたしを愛しているなら、あなたがたはわたしの戒めを守るはずである」と。すなわち、キリストを愛しようとする者は、まず彼の戒めを守れということになり、戒めを守ることが先で、愛することが後となる。これは、まさに私たちが唱える魂の救いの道と矛盾するように見える。もちろん、聖書はそれを全体を貫く精神をもって解釈すべきもので、たとえ二、三の節句がこれに反対の趣旨を示すことがあったとしても、私たちの信仰は変わらない。しかし、この節を前後のつながりから解釈すれば、キリストが完全な行いを彼を愛するための必要条件とはしなかったことは明らかである。キリストの要求は、彼の弟子である者は、感謝の捧げ物として彼の戒めを守るべきだということであった。このような解釈は、恵みを救世

の土台とするキリスト教の教理として、最も分かりやすい真理と言わざるを得ない。まして、近年の聖書の節句を批評する学問が私たちの助けとして現れ、この難解な句を明瞭に私たちのために解明しているとなれば、なおさらだ。「守れ」(Teresate)は「守るだろう」(Teresete)である。前者は従来の本文であったが、後者は最近の批評学者が採用するところであり、英文改正翻訳はこれによって、従来の“Keep my commandments”を“Ye will keep my commandments”に変更した。すなわち、全節の意味は、キリストの戒めを守るに至るのは、彼を愛する自然の結果であり、彼を愛すれば必ず彼の律法に従うに至るだろう、ということなのだ。

第二の難解な句として、私たちの前に常に引用されるものは、ヨハネの手紙第一 四章二十節の半節、「目に見える兄弟を愛していない者に、目に見えない神を愛することはできません」である。私たちの信仰に反対する者は、「これは実に隣人愛を神を愛することの前に置くもので、神を愛そうとする者はまず人を愛すべきだ」という教訓だ」と言う。

私たちは言う、この半節をもって恵みの教理 (Doctrine of Free Grace) に反対する者は、詩篇の「愚かな者は心の中で『神はいない』と言う」(詩篇十四篇一節)の語から「神なし」の片句を取り、「聖書は無神論を教えているものだ」と述べた人と比較せざるを得ない。読者はただこの節の前後二、三節を一見すれば、使徒ヨハネの意図を最も明白に理解することができるはずだ。「私たちが神を愛するのは、彼がまず私たちを愛してくださったからである」、「もし『私は神を愛する』と言って、その兄弟を憎む者は、偽り者である」。なぜ

なら、目に見えない神を愛する者が、目に見える兄弟を愛さない理由はないからである。

キリスト信者の善行の根源は、パウロが言った「私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死なれたことによって、神は私たちに対するご自分の愛を明らかにしておられます」(ローマ人への手紙五章八節)という意図に存在するのだ。私たちはもはや道徳上の義務として悪を避け善を行うのではなく、キリストの愛に駆り立てられて (Sunechei Constraimeth 「強いられて」) なすのだ。すなわち、私の心が満ち足りて余裕があるならば、私は世に与えざるを得ないことになるからだ。「私が福音を宣べ伝えなければ、実に災いである」。私が善い事業に従事しなければ、実に災いである。私の心中に存在するこの溢れんばかりの恵みを、もし私が他に漏らさないならば、私は喜びをもつて破裂しそうになるだろう。私は実に「愛によって病む」(雅歌五章八節)者なのだ。私が神と和合してから、私に平和を与えることができなかった学問も、今は再び無限の快樂と慰めを私に与えるに至った。宇宙は、真に壮麗な大美術となった。

I fear no more. The clouded face

Of Nature smiles; through all her things

Of time and space and sense I trace

The moving of the spirit's wings,

And hear the song of hope he sings, — Whittier

我もはや恐れず、

曇りし自然の面影も

今は笑みを含みけり、

限りあるもの、朽ちるもの、

感じ得るものすべて皆、

触れる聖霊の羽音して

希望の賛美唱えける。

歴史は大戯曲として味わうことができ、地球は大花園として眺めることができる。憂鬱の中に沈殿していた私の生涯は、今は春の蕾と共に動き、冬眠していた虫と共に萌え蘇り、生命は重荷ではなく、快樂の中の快樂となった。今は見るもの聞くもの一つとして私の注意を惹かないものはない。

*Christianus sum; nihil in rerum natura a me alienum puto.*

私はキリスト信徒である。人と自然に関することにして、私の心による真面目な探求を要しないものは何もない。

すべては、あなたがたのものです。あなたがたはキリストのもの、キリストは神のものです。

(コリント人への手紙第一 三章二十一、二十二、二十三節)

義務がその苦味を失ってから、仕事は苦痛でなくなった。額に汗して食を求めざるを得ない罪人も、今は安心と喜樂の中に神の賜物を受け取るに至った。経済学者が称する「労働は重荷である」(Laboris onerosus)との言葉

は、「労働は快樂である」と言うに至った。この十九世紀の繁忙な社会において、誰が永久の休息を永久の労働の中に欲しない者がいるだろうか。今の人は休息、休息と絶叫するのである。過労は彼らの最も恐れるものである。職工は労働時間を一日八時間に縮めんがために同盟罷工（ストライキ）を続けている。学者は疲労を恐れて、渡り鳥が春秋と共に南北に移動するように、寒暖に追われながら一年中逃げ回っている。そして、労働の主であるキリストの僕にして、しかも牧者の任務を負う者も、疲労という悪魔に強要されて、悪疫が羊を襲うにも関わらず、神の聖殿は寂しくて人がいなくなることに構わず、「疲れた」との一言が天子の權威そのもののような重みを持つ理由となり、世の怠惰で臆病な者の真似をして山に走り込み、海辺で怠惰な眠りを貪るに至ったのは、十九世紀末期の現象である。今の世の人は、労働のために疲労しているだけでなく、また疲労するのではないかという心配から疲労しているのだ。

疲労は、筋肉や神経の過度の使用から来るものは少なく、精神の過労から来るものが多い。筋肉も神経も使用しなければ、共に衰弱するものだ。「錆びるよりは磨り減らせ」（Better to wear out than to rust out）。使用しない体力は錆び朽ちるのだ。労働することに勝る養生法はない。心配は毒物の長であり、疲労は病の大原因である。ソロモン王は言う、

喜んでゐる心は健康を良くし、

打ちひしがれた霊は骨を枯らす

（箴言十七章廿二節）

そして、心配の原因は、果たされない責任の思いである。もし借金が人物を伸長させる最大の妨げであるとする



るならば、罪の念（すなわち神に対する借金）は、無限の生を有する人間の魂の活動に及ぼす最大の障害であることは明らかだ。

罪から赦されて、私たちは労働しても疲労しないに至る。ヘラクレスのような活動力は、私たちが主イエス・キリストを信じてから来る。

疲れたる者には力を与え、精力のない者には勢いを与えられる。若者も疲れて力尽き、若い男たちも、つまり  
ずき倒れる。しかし、主を待ち望む者は新しく力を得、鷲のように、翼を広げて上ることができる。走つても力衰えず、歩いて疲れない、

（イザヤ書四十章廿九、卅、卅一節）

両肺が朽ち果ててなお意気軒昂として救世に従事した故沢山保羅、繊細で知的な神経を持ちながらインドの熱風にさらされながら、ペルシア語に聖書を翻訳したヘンリー・マーチン、イギリスの汚職を排除せんがために山のような外患内憂に打ち勝ちつつなお八十歳の健康を維持したジョン・ウェスレー、——然り、詩人ゲーテの言う「休むな、急ぐな」の生涯は、キリストの救いにあずかつて後に初めて達成できるのだ。

そうだ、天道は間違っていないのだ。私には死の恐怖がある、そして世にはこの恐怖を取り去る道がある。私には神と共にいようとする希望がある、そして私の神に至る道がある。世には不満と不幸がある、そしてこれに勝る喜びと満足がある。世には苦痛がある、そしてこれを癒すに足る力がある。私は歓楽をもってこの地球に住むことができるのだ。私は静粛と安然に天から与えられた知能を磨くことができるのだ。私は偽善や不敬の危険なくして慈善伝道に従事することができるのだ。教え導き養おうとする私の妻は、快楽な「ホーム」を私に提供

してくれる。キリストの愛神主義は、利他主義と利己主義の両方を超越して、最も多く他を利し、最も多く己を利する道を私に教えてくれた。私は罪を自覚してそれを避けることができる。私は私に与えられた赦しが神の公義に反しないものであることを知っているがゆえに、私がすべての承諾することによってそれに与えることができる。私が求めようとするところのものにして、天が私に付与されないものはない。天地創造は実に失敗ではなかったのだ。インマヌエル、神は私たちと共におられる。人生は一度経験する価値がある。